

トマス・ランプルーとカトリック教批判

—— 1678年の火薬陰謀事件記念説教 ——

高 橋 正 平

序

1678年11月5日にエクセターの主教であるトマス・ランプルー (Thomas Lamplugh)⁽¹⁾ は火薬陰謀事件記念説教を行った。11月5日は言うまでもなく1605年11月5日にジェズイットによって計画された国会爆破によるジェームズ一世暗殺未遂事件が起こった日である。ランプルーの説教は事件から73年後の記念説教で、上院で行われた。ランプルーとはいかなる人物であったのか。彼は1660年の王政復興時に自ら「熱烈な王党派」と公言し、教区民には1660年末にカトリック教に改宗したジェームズ二世に服従を勧め、新教徒オレンジ公ウィリアム三世が1688年6月に大陸から上陸し、エクセターへの行進の情報を得るやロンドンに行き、ウィリアム三世に揺るがぬ忠誠心を言明した。ウィリアム三世は彼を「正真正銘の王党派」と絶賛し、ヨーク大主教の職を与えた。ランプルーはウィリアム三世に忠誠を誓った最初の一人であったが、ジェームズ二世はカトリック教徒であり、王が新教徒か旧教徒かには関係なくランプルーは日和見的な王党派であった印象を与える。ランプルーが火薬陰謀事件記念説教を行った時の王はチャールズ二世で、彼はカトリック大国フランスへの亡命から帰国したカトリック教徒（告白したのは臨終の際であった）であった。記念説教を行った1678年にランプルーはエクセターの主教であり、その説教はランプルーが生存中に印刷を命じた唯一の説教であった。ランプルーの説教はウェストミンスター寺院教会での上院議員を前にした説教である。新教徒で王党派説教家の、しかも上院での火薬陰謀事件記念説教と聞けば誰しもがそれが格好の陰謀事件批判説教であると察しはつく。しかも説教の行われた1678年11

月5日以前の8月からイギリスはカトリック陰謀事件で騒然としていた。その陰謀事件はジェズイットがチャールズ二世を暗殺し、弟でカトリック教徒のジェームズ二世を王にし、新教徒を虐殺する計画であった。この事件は結局は虚偽であることが判明したが、1678年から1681までその余波が続き、多数の無実のカトリック教徒が処刑された。それはジェズイットによる1605年11月5日のジェームズ一世暗殺計画を思い起こさせる国内を震撼させた事件であった。そのような背景のなかでのランブルーの火薬陰謀事件記念説教である。ランブルーにとってはジェームズ一世殺害未遂事件とチャールズ二世暗殺計画しかも両事件ともジェズイットによる事件であったのだからその説教は絶好のカトリック教会・カトリック教徒批判の説教となるはずであった。ところがランブルーはチャールズ二世やチャールズ二世暗殺事件についてはほとんど言及せず、もっぱらジェームズ一世暗殺事件に終始している。説教を聞いた上院議員はランブルーからチャールズ二世の暗殺を計画したカトリック教徒への批判も期待したであろうが、それは全くの期待はずれであった。なぜランブルーはチャールズ二世暗殺計画事件に触れなかったのかは本論の論点の一つである。本論では最初ランブルーの説教に考察を加え、ランブルーのカトリック教会批判を明らかにし、そのカトリック教批判がチャールズ二世暗殺事件批判まで至らなかった経緯について論じていきたい。

1. 「ルカ伝」9章55-56節における「福音」と「律法」

火薬陰謀事件記念説教には一定の説教方法があった。それは聖書から火薬陰謀事件に類似した一節を選び、説教の題材とし、聖書の一節の解釈、事件への聖書の一節の適応、ジェームズ一世の奇跡的な事件からの救出、救出に際し神が示した慈悲そして最後に神への感謝である。ランブルーが説教の題材として選んだのは以下の「ルカ伝」9章55-56節（原文のまま）である⁽²⁾。

But he [Jesus] turned and rebuked them [James and John], and said, Ye know not what manner of Spirit ye are of. For the Son of Man is not come to destroy mens lives, but

to save them.⁽³⁾

なぜキリストが弟子のヤコブとヨハネを叱責したのか、その理由はこの一節の前の54節にある。キリスト一行がエルサレムへの途上サマリア人の住む村を通過中にサマリア人がイエスに宿泊を拒否した。それに立腹した弟子たちがサマリア人を焼却することをイエスに提案したからである。

And when His disciples James and John saw it [the Samaritans' not welcoming Jesus], they said, Lord, wilt Thou that we command that fire come down from Heaven, and consume them [the Samaritans], even as Elias did?

「ルカ伝」の記述から火薬陰謀事件との類似性を指摘することは容易である。天からの火によるサマリア人焼却1605年の火薬陰謀事件を思い起こさせる。一方は天からの火、他方は地下の火薬による殺害である。サマリア人焼却は村人すべての焼却であり、火薬陰謀事件では国会参列者のジェームズ一世、王妃、貴族、判事、国会議員、宗教関係者の殺害である。「ルカ伝」も火薬陰謀事件も「火」による破壊という点では類似した事件であり、その動機も類似している。「ルカ伝」の場合、キリストは旅人ならば誰にでも提供される宿泊を拒否されたが、その理由は「キリストの顔がエルサレムへ行くかのようにであった」からで、それは宗教上の違いである。ジェームズ一世爆破計画もイギリス国教徒とカトリック教徒との間の宗教上の違いがその理由だった。ただキリスト教徒の弟子たちが天からの火によるサマリア人焼却提案には先例があったのに反し、火薬陰謀事件には先例がなかった。サマリア人焼却事件の先例は「ルカ伝」9章54節の「丁度エリアが行ったように」である。「エリアが行ったように」とは「列王紀下」1章9節-16節への言及である。そこには異教を崇拝したイスラエルの王アハジヤが自らの死をエリアから告げられるのを嫌い、エリアを捕まえようとしたことに対して天からの火により、アハジヤ王の50人の長と50人の部下は滅ぼされたと記されている。アハジヤ王のエリアへの行為は神への反逆行為と見られ、神からの天罰を受けたのである。「ルカ伝」のイエスの弟子たちのサマリア

人焼却はこの「列王紀下」1章9節-16節をその先例としている。だからキリストの弟子たちは自分たちのサマリア人焼却提案には問題はないと思った。しかしキリストから見れば弟子たちの行為はキリストの精神、福音精神から著しく逸脱した行為である。なぜならばキリストは人々の命を破壊するためではなく、救うためにこの世に来たからである。人の命を救うことをその使命としたキリストが弟子たちの提案を受け入れるはずがない。なぜ弟子たちはそのような提案を行ったか。それは弟子たちの「無知」に由来する。その「無知」は、弟子たち自身の自らについての無知と弟子たちの主なるキリストについての無知である。前者の無知は、弟子たちがいかなる人物であるかを知らないことについての無知である。キリストから見れば弟子たちは「律法」ではなく「福音」の下にあることを知らないがゆえにキリストへサマリア人焼却を提案するのである。「福音」の下にある弟子たちは「厳しい、思いやりのない感情、あらゆる憎しみに満ちた、復讐心に燃えた気分」を抑え、むしろ「冷静」と「節度」を示すべきなのである⁽⁴⁾。キリストは弟子たちに向かって、君たちはエリアの弟子なのかそれともキリストの弟子なのかと問うが、二人の弟子はキリストの弟子である故キリストに従うのは当然である。キリストは人々の命を「破壊する」ためではなく、「救う」ためにこの世に生まれたのであるから、弟子たちもサマリア人を滅ぼすのではなく、むしろ彼らを救わねばならない。後者の無知は、二人の弟子がキリストはなぜこの世に来たかについての無知である。キリストは「敵意、怒り、復讐の荒れ狂う嵐を静め、侮辱を許し忘れる尊い冷静、平靜、落ち着きを人々の魂に生じさせ」⁽⁵⁾「人々の命を破壊するためではなく、救うために」この世に生まれた。キリストは人々の命を救うためには自らの命をも投げ出す人である。以上の二つの無知から弟子たちはサマリア人焼却をキリストに提案するのである。キリスト一行とサマリア人との間の不和はユダヤ人とサマリア人との間の宗教の違いによる不和である。旧約のエリアとアハジヤ王との対立も後者の異教の祭儀をイスラエルへ導入したことがその原因であり、アハジヤ王は偶像崇拜者の典型であった。ユダヤ人とサマリア人との不和からランブルーは何を語ろうとしているのか。言うまでもなくキリスト一行とサマリア人との間の敵対関係は火薬陰謀事件におけるジェームズ一世側とカトリック

教徒との対立関係に通ずる。キリスト、二人の弟子、サマリア人を火薬陰謀事件へ適応すればどうなるか。サマリア人焼却提案者のキリストの弟子は火薬陰謀事件計画者ジェズイット、被焼却者サマリア人は国会議事堂臨席者となる。キリストは誰に対応するのか。「敵意、怒り、復讐の荒れ狂う嵐を静め、侮辱を許し忘れる尊い冷静、平靜、落ち着きを人々の魂に生じさせる」キリストは平和を希求し、*Rex pacificus* と称されたジェームズ一世に適応されるのか。キリストの弟子が火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイット、焼却対象のサマリア人が国会臨席のジェームズ一世王朝の要人と対応されることには少々疑問が残る。キリストと宗教的に対立するサマリア人はまたイギリス国教会と対立するカトリック教徒ともなる。厳密に考えれば「ルカ伝」の記述の火薬陰謀事件への適応には疑問が生じてくるが、「ルカ伝」の論点は2点ある。一つは、サマリア人がキリストを敵視したこと、二点目はそのサマリア人への許しである。「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応は様々に考えられるが、ランブルーが最も強調したかったのはサマリア人焼却を提案する二人の弟子とサマリア人に対してキリストが取った寛容な態度である。宗教上の違いにより神の子、キリストへの無礼な態度を取ったサマリア人に対してすらキリストは彼らを責めるのではなく、逆に彼らを焼却しようとした弟子たちへの叱責が大きく取り上げられてくる。ランブルーの「ルカ伝」解釈ではサマリア人焼却提案をする弟子たちの行動と彼らを叱責するキリストが彼の重要なメッセージとなっている。キリストと弟子の関係は福音精神とエリア精神の関係であり、ランブルーは両者の精神の違いを特に重視している。それはまた福音精神を具現するジェームズ一世とエリア精神に身を固めたカトリック教徒ともなってくる。

2. キリストの精神とエリアの精神

「ルカ伝」でのキリスト一行とサマリア人との対立は何を表しているのか。ランブルーは両者の対立を宗教上の違いから生じた対立と考えるが、ランブルーが問題にしているのはサマリア人焼却を提案する二人の弟子の行動と弟子たちを叱責するキリストである。キリストのサマリア人への態度と弟子たちのサマ

リア人への態度には明らかに違いがある。キリストは、サマリア人から冷遇を受けてもお彼らに愛情を注ぐのに反し、弟子たちはサマリア人の冷遇に立腹し、即座に天からの火による焼却をキリストに提案する。弟子の行動はエリアの精神に基づくときキリストは弟子たちを叱責する。ランプルーはキリストの精神とエリアの精神をどのようにとらえているか。ランプルーによればキリストの精神は福音の精神で、それはサマリア人をも救おうとする敵への愛である。キリストの精神は「彼の話、沈黙によって彼の生涯、受難と死から知る」ことができる⁽⁶⁾。それは社会的な弱者、罪人、敵を許す精神であり、サマリア人に対してすら優しく慈悲深かったキリストの態度である⁽⁷⁾。それはまたエルサレムを焼却するよりもエルサレムを救う精神にも表れている⁽⁸⁾。キリストの弟子ヤコブとヨハネが、「エリアが行ったように、主よ、天から火が降りるように命じましょうか」と言ったが、それに対してキリストは以下のように答える。

...now we are under the Oeconomy of the Gospel, not of the Law, and are not to do as Elias did, that is, not to teach or practise any thing, but what the settled Canon of the Scripture, the revealed Will of God, will own; ⁽⁹⁾

キリスト教徒は律法ではなく福音の下にある。エリアの時代は過ぎ去り、今はキリストの福音の時代である。「聖書という固定した基準、神の啓示意志」に基づかなければ何も教えたり、実践できない。天からの新しい啓示や声を主張したり、もっともらしい口実の下で我々の虚偽、妄想、詐欺行為を世の中に伝えるべきではない⁽¹⁰⁾。福音の精神とは「たとえ敵であっても飢えているときは彼らに食べ物を与えねばならない。のどが渇くときには飲み物を与えねばならない」精神である⁽¹¹⁾。キリストのこの福音精神に反し、エリアの精神とは何か。それは律法の精神であり、突き詰めれば復讐精神である。

That the Spirit of Elias was a Spirit of Revenge, and Retaliation, to have the Law inflicted upon Offenders, to the utmost severity: And therefore they who can indulge themselves the enjoyment of that Hellish Sensuality, that Spirit of Revenge, or

Retributing of Injuries, without any mercy or forgiveness, are not of the Spirit of Christ.⁽¹²⁾

エリア精神は、罪を犯した者への徹底した復讐、報復の精神である。それゆえその精神には慈悲も許しもなく、キリストの精神とは無縁の精神である。

So they, who do not practise that high piece of Christian perfection, of overpowering evil with good, and so heaping those precious Coals of Love, and Blessing, and Prayer, upon their Enemies heads, are not of Christ's Spirit.⁽¹³⁾

サマリア人焼却を提案するキリストの弟子たちは敵への愛、祝福、祈りを欠くカトリック教徒と同じであり、福音精神とは無関係な復讐精神である。福音精神と律法精神の相違を繰り返すランブラーの意図は明白である。ランブラーは福音精神について更に次のように言葉を続ける。

Well, now 'tis time to tell you what the Gospel-Spirit is: And that we have done in part already, by setting down what the Mind of *Christ* was, and how he behav'd himself in his Conflicts towards his malicious Enemies, who despitely us'd him. And by his meek and merciful behaviour towards them, we may gather, that Men of Implacable Malice, of Corrupt Principles, Hereticks and Schismatics, may be capable of Humanity and Mercy:⁽¹⁴⁾

ここでも敵に対して慈悲深い態度を取ったキリストの福音精神が強調されている。ランブラーは、更にキリストに悪意ある冷遇を示したサマリア人ですら博愛、慈悲を受けることはできると言っている。これはランブラーの異教徒への寛容な態度の表れであり、ランブラーもキリスト同様弟子たちのサマリア人への天からの無慈悲な焼却には賛同の姿勢は見せていない。ランブラーは、さらにコリント人への第一の手紙からパウロの「もしキリストを愛さない者があれば、のろわれよ」を引用するが、キリストを受け入れない異教徒は即座に生け

贄として火へ捧げられることがあってはならないと言う⁽¹⁵⁾。ランプルーの異教徒への態度は弟子たちを叱責するキリストと同じである。福音精神がキリストの敵への愛をその大きな特徴とするが、キリストの弟子たちのサマリア人への復讐精神はキリストからは予想だにできない精神である。キリストに従うのであれば弟子たちはサマリア人の態度に寛容でなければならなかった。キリストが弟子たちを叱責した理由は弟子たちの敵への許しの精神の欠如であった。弟子たちがとった行動は「目には目を」的な律法精神であった。律法精神がすべて排斥されるべきかと言えばそうとは言えない。律法精神には肯定的な律法精神と否定的な律法精神の二つがあるとランプルーは言う。肯定的な律法精神は主からのサウルへのアマレク人根絶命令がその一つの例である。主はサウルへ次のようにアマレク人への徹底的な根絶を命令した。

Go smite Amaleck, and utterly destroy all that they have, spare them not; but slay bothe Man and Woman, Infant and Suckling, Ox nad Sheep, Camel and Ass. (1 Sam. 15.3)⁽¹⁶⁾

偶像崇拜におぼれるアマレク人を根絶し、カナンの地にイスラエル人を定住させよという主のサウルへの命令は「律法」精神をよく表している。主の許可がなかったならばサウルのアマレク人殺害は「殺人」であり、「正義」とは言えなかった⁽¹⁷⁾。ある民族の罪が徹底的に行われ、神がその罪処罰の実行命令を下す場合、その実行は正義の実行と言える⁽¹⁸⁾。これに反し、神の意志の明白なお告げなしに神と神の宗教を敵視する人たちを焼却するために「火」を準備する人々は、「死、火、地獄、破壊の息子」であり、福音精神とは無縁な存在となる。キリストの弟子たちのとった行動はまさしく「死、火、地獄、破壊の息子」の行動であり、キリストの福音精神とは根本的に相対立する精神である。エリアの行動は神の意志の異常な啓示に由来し、多くの場合「確立した義務の規則」に反している。それゆえエリアの行動は正当化できないとランプルーは言う⁽¹⁹⁾。エリアの精神はいわば狂信的な精神である⁽²⁰⁾。狂信家には「不規則な病的な情熱」がある⁽²¹⁾。その情熱は「争いと分裂の母ではないが姉」であり、「論争、中傷、う

わざ、騒動、憎しみ、熱意、対抗心、騒乱、異端」(Gal.5.20-21)と普通は表裏一体である⁽²²⁾。熱狂は胆汁のようなものであり、法的な手順なしに人々を残酷な残忍な忌まわしい暗殺へと駆り立てるが、それは単に敵意を満足させ、有害な計画を引き起こすだけなのである。

...that Gall which will embitter, and sower every thing that comes near it, put Men upon cruel, bloody, abominable Assassinations, inflicting death (and that with savage cruelty) without any legal proceedings, but meerly to satisfie their malice, and bring about pernicious designs.⁽²³⁾

このようにランブルーはエリア的精神を狂信的な恣意的な復讐精神とらえ、その精神がキリストの福音の時代とは相容れないことを指摘する。

これまでランブルーが説教の題材に挙げた「ルカ伝」9章55-56節からキリストはなぜ弟子たちを叱責したのかについて論じてきた。その叱責にはキリストの愛の精神、福音の精神が反映されている。敵への愛を説くキリストからすれば弟子たちのサマリア人焼却はとうてい受け入れることはできない。なぜなら人の命を救うためにこの世に生まれてきたキリストがたとえ自らを敵視することがあってもサマリア人を焼却することはできないからである。キリストがいかなる人物か、またキリストの弟子たちがいかなる使命をこの世で果たさねばならないか、これらについて弟子たちは全くの無知をさらけ出す。キリストの弟子たちもキリスト同様人の命を救わねばならない。それなのに弟子たちはサマリア人焼却をキリストに提案した。「ルカ伝」9章55-56節にはキリストの「汝の敵を愛せよ」の精神が具体的に表われている箇所である。キリストを敵視するサマリア人にすら愛を注ぐキリストの姿をランブルーは強調したかったのである。ここで我々はランブルーの説教は火薬陰謀事件記念説教であることを忘れてはならない。ランブルーは「ルカ伝」9章55-56節から火薬陰謀事件をいかにして批判しているのか。キリストの「汝の敵を愛せよ」は火薬陰謀事件とどのように関わってくるのか。次のこの問題を論じていきたい。

3. 「ルカ伝」と火薬陰謀事件

「ルカ伝」9章55-56節を火薬陰謀事件との関連で見るとそこにはランプルーの
カトリック教徒批判が表れているのは当然のことである。そもそも火薬陰謀事
件記念説教は聖書から火薬陰謀事件に類似した箇所を選び、事件を批判するこ
とを目的としている。ただ単に聖書の解釈に終わらないで、聖書解釈がいか
にして火薬陰謀事件へ適応されるかがまた問題となってくる。ランプルーの「ル
カ伝」からの火薬陰謀事件批判はどのように行われているのか。火薬陰謀事件
批判は当然事件を計画したジェズイットひいてはカトリック教会への批判に通
ずることは言うまでもない。

ランプルーが「ルカ伝」9章55-56節を説教の題材に選んだ理由の一つは「ル
カ伝」のエピソードが火薬陰謀事件批判に都合がよいと思ったからであろう。
上で既に触れたがサマリア人のキリスト冷遇はイギリス国教会によるカトリッ
ク教徒への冷遇（とカトリック教会は見なした）となる。天からの火によるサ
マリア人焼却はジェズイットによるジェームズ一世殺害となる。キリストのサ
マリア人への慈悲はジェームズ一世のカトリック教徒への宥和政策である。キ
リストとサマリア人との不和の原因は宗教上の違いに由来するが、これはイギ
リス国教会とカトリック教会との違いである。さまざまな点においてキリスト
とサマリア人との対立はジェームズ一世とカトリック教徒との対立を思い起こ
させるが、上記でも指摘したようにサマリア人エピソードを火薬陰謀事件に適
応すると少々無理が生じてくることは確かである。ランプルーが「ルカ伝」か
らカトリック教会を批判したかったのはキリストを敵視するサマリア人焼却と
サマリア人へのキリストの慈悲である。サマリア人のキリストへの態度は確か
に弟子たちを立腹させたが、しかし、何よりも問題なのはそのサマリア人を焼
却しようとした弟子たちの行動である。キリスト敵対者にすら愛を注ぐキリス
トの福音精神からは思いもよらない弟子たちの提案である。キリストは、弟子
たちの行為は自らについての無知とキリストについての無知から生ずると言っ
たが、これは火薬陰謀事件ではカトリック教徒の自らについての無知とジェー
ムズ一世についての無知となってくる。カトリック教徒は事件を引き起こすほ

どイギリス国内で冷遇されていたわけではない、とランブルーは言う。カトリック教徒には法の特権、王の臣下としての保護があり、処罰も緩和されていたし、中には信頼と名誉ある地位に昇進していた者もいた。ただカトリック教徒に欠けていたのは「忠実な、謙虚な、平和的な、慈悲に富む精神構造」⁽²⁴⁾ だけであった。この精神はあらゆる良きキリスト教徒特に良き臣民にあるべき精神であるが、この精神がカトリック教徒にはなかった。ジェームズ一世下では王から手厚い法的保護を受けていたカトリック教徒だけに彼らの火薬陰謀事件は理解できないことである。またサマリア人焼却はサマリア人の住む村全体の焼却であるが、それと同様火薬陰謀事件はジェームズ一世を含む国会臨席の政府要人のすべての殺害を目論んだ凶悪な未遂事件である。ランブルーは異教徒が同様な事件を計画したことはないと言え、事件が「野蛮な残酷な極悪非道な忌まわしい前代未聞の反逆」⁽²⁵⁾ であることを強調する。サマリア人の住む村すべての破壊と国会議事堂爆破はその凶悪な点において類似している。火薬陰謀事件は、カトリック教徒自身ですらもが恥じるほどの嫌悪感を示した世界でも類を見ない極悪な行為であり、カトリック教徒はキリストの弟子たち同様彼らがキリスト教徒であることを忘れていた。このことは彼らの無知を暴露している。サマリア人焼却を提案した弟子たちは自らがいかなる意味でキリスト信奉者であるかを認識しておらず、福音精神とは相容れない矛盾した提案を行う。弟子たちのキリストについての無知についてはキリストが弟子たちを「人々の命を破壊するためではなく、救うために」と言って彼らの提案を一蹴したように、二人の弟子はキリストが福音を広めにこの世にやってきたことについての無知とキリストの信奉者にあるべき「優しい善良な特質」欠如をさらけ出している。弟子たちの行為は旧約の律法精神に基づいた行為であり、キリストの福音精神からはほど遠い行為であった。二人の弟子はイエスと自らについての「無知」がなければサマリア人焼却をイエスに提案することはなかった。むしろキリストを敵対したサマリア人に対してすら愛情を示したであろう。しかし弟子たちは自らがいかなる意味でキリストの弟子であるのかについては全く無知であった。一時の感情任せの行為が弟子たちのとった行為であった。弟子たちのキリストについての無知は火薬陰謀事件とのからみで考えるとカトリッ

ク教徒側のジェームズ一世という王についての無知となってくる。彼らはジェームズ一世がいかなる王であるかについて無知であろうとした。ジェームズ一世は言うまでもなく王権神授説を唱えた人物であり、王は地上における神の代理人とも言うべく存在であることに最後まで執着した。王は何があってもいかなる者も侵すことのできない神聖な王権に包まれている。カトリック教側がジェームズ一世の王権神授説について無知であったかと言えば実際はそうではなく、彼らはその説を熟知していた。ただカトリック教会特に火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットは王権を認めていなかっただけである。王権についての両者の最も大きな違いは、ジェズイットは王権は民衆から仮に王に譲渡された権力であると考えたのに反し、ジェームズ一世は絶対王権を主張した点である。時代は絶対王政から市民社会へと移行する途上にあり、絶対王権は徐々にその地位を民権によって奪われていく。そのような時代にあつてのジェームズ一世とジェズイットとの対立である。王権に対する見解の相違がジェームズ一世とジェズイットとの不和の大きな原因であった。それにカトリック教会側が俗権にまで手を出し、ジェームズ一世と衝突したことも両者の争いを引き起こす要因でもあった。カトリック教会は政治的な主権争いからジェームズ一世の絶対権力を認めることができなかった。サマリア人焼却提案は弟子たちの無知による提案であるが、同様にジェームズ一世殺害はカトリック教徒の王権への無知による殺害計画である。サマリア人焼却事件と国会爆破事件は共に「火」による破壊である。その破壊は一方は村人全体の焼却であり、他方はジェームズ一世を含む政府要人の殺害である。「ルカ伝」ではサマリア人焼却よりはむしろそれを提案した弟子たちへのキリストの叱責と何よりも敵視するサマリア人へ許しの姿を示すキリストが強調されている。「ルカ伝」ではキリストの敵への福音精神が最終的には強調されているようにジェームズ一世も国会爆破という前代未聞の凶悪事件を計画したジェズイット(カトリック教徒)に対してすら法的な保護を与え、イギリス国内には彼らの生命をも保証していた。ジェズイットのジェームズ一世への行動がいかにジェームズ一世への背信行為であることをランプルーは強調している。ジェズイットの暗殺計画はまさにエリアの精神に則った律法精神であり、時代錯誤的な行動であった。ジェ

ズイットの目的のためには手段を選ばない横暴さについてランブルーは次のように言う。

...they, who let fly their Thunder-bolts, scatter thick their their *Anathema's*, and by their *Spiritual Assassination*, cursing Mens Persons, with Bell, Book and Candle, make way for Blood and Slaughter, and after that in their Martyrologies, place their Murtherers as Martyrs, they may call themselves, *Men of the Society of Jesus*, but they are of another Spirit, far different from the Spirit of the *Lord Jesus*; They are not of the Gospel-Spirit.⁽²⁶⁾

ジェズイットはあたりかまわず「雷」を落とし、精神的暗殺を企て、しかもその暗殺者を殉教者として殉教者列伝にその名を載せ、崇める。しかもジェズイットは神の名を徒に語り、神に誓って偽証し、偽証の証人となるように神にお願いする。

But they, who vent their own Sinister Plots, for his [God's] Inspirations, and tell the People, that God puts them upon such Designs, do not only take his Name in vain, but do commit a Sin worse than Perjury: For that only calls him to be a Witness to an Untruth, but this make him the principal and first Author of a Lye.⁽²⁷⁾

ジェズイットの証言はすべて「虚偽」である。彼らのジェームズ一世暗殺計画も「虚偽」の論理に基づいた計画である。「ルカ伝」の弟子たちのサマリア人焼却には対して「聖書という固定した基準、神の啓示意志」が認めることはなかったランブルーは言っているが、それと同様国会爆破によるジェームズ一世暗殺には聖書や神からのお墨付きは見られず、それはジェズイットの勝手な独断的な暗殺計画であった。

「ルカ伝」での弟子たちの行為とそれをたしなめるキリストはジェームズ一世殺害を狙ったジェズイットとジェームズ一世の関係につながってくる。「ルカ伝」の記述の火薬陰謀事件への適応にはいささか困難が伴うが、「ルカ伝」にお

けるサマリア人への温情を火薬陰謀事件に探せばどうなるか。サマリア人への寛容な態度を突き詰めれば、それは火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットへの寛大な許しということになる。「ルカ伝」におけるキリストの福音精神を火薬陰謀事件へも適応せざるをえない。つまりランプルーは事件を起こしたジェズイットへの許しを説教聴衆へ要請するようなものである。火薬陰謀事件は事件の張本人弾劾の説教である。事件張本人への寛容な慈悲ある許しを訴えた説教はこれまでにはない。サマリア人への温情を訴えれば火薬陰謀事件は過去の事件としてすべてを許してあげようという理想的なキリストの福音精神を表す説教となる。火薬陰謀事件では実際には首謀者は逮捕後処刑され、事件関係者が許されることはなかった。ランプルーは事件の張本人を許せとは言っていないが、「ルカ伝」解釈を火薬陰謀事件に適応すれば事件計画者のジェズイットへの許しが強調されてくる。ランプルーがそこまで説教のなかで意図したのか、また聴衆がそこまで読みとったかは定かではない。説教が行われた1678年11月5日を取り巻く状況は数ヶ月前のカトリック陰謀事件の余波を受け、カトリック教徒への人々の不信・反発は大きかった。もしキリストのサマリア人への愛情を火薬陰謀事件に適応すれば、火薬陰謀事件関係者への政府による許しということになる。しかし、いかにキリスト的な福音精神を強調しても火薬陰謀事件の首謀者への寛大な扱いは許されえない。仮に火薬陰謀事件の首謀者を許すような説教になれば、火薬陰謀事件記念説教の目的には著しく反することになる。カトリック教に同情を示すような雰囲気はなかった。いかに「ルカ伝」における福音精神を訴えようともイギリス国教会に属する者として火薬陰謀事件関係者に福音精神を示すことはできなかった。ここにランプルーの説教の矛盾が表れている。「ルカ伝」のキリストのサマリア人への温情は火薬陰謀事件計画者への温情とは無関係なものである。時の王チャールズ二世がいかに親カトリック的であってもランプルーにはそこまではできなかった。「ルカ伝」9章55-56節の火薬陰謀事件への適応には無理なところがあった。その「無理」を覆い隠すようにランプルーは「ルカ伝」から離れて、カトリック教会の俗事への介入から端を発したジェームズ一世王朝とカトリック教会の主権争いや聖書に根拠を持たないカトリック教会の様々な儀式批判へと説教を展開していく。これ

はランブロー自身が「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応には無理があることを認識した結果であろうか。「ルカ伝」9章55-56節を最後まで援用して火薬陰謀事件を批判できなかったところにランブローの説教の限界があったと言わざるをえない。

4. ランブローのカトリック教会批判

ランブローは「ルカ伝」解釈からイギリスを敵視するカトリック教会批判へと論点を移す。その第一の批判はカトリック教会側の王権軽視への批判である。カトリック教会が「魂の救済のため」と称して俗事にまで介入してきた経緯はよく知られているが、俗事介入にあたり最大の障害は王である。だからカトリック教会は俗事介入に際し王権を無視し、彼らが俗事においても支配権を有していると主張する。カトリック教会の王権軽視はカトリック教会の聖と俗の両領域における支配権確立の結果に他ならない。そのはなはだしい例がジェームズ一世の暗殺計画である。ところがキリストはカトリック教会とは異なり福音精神に基づきあらゆる権力へ服従を示していた。両親、ユダヤ人最高法院、ヘロド、ピラトへの従順な服従である⁽²⁸⁾。使徒たちも為政者への服従によりこの世に平和をもたらそうとした⁽²⁹⁾。原始教会でもたとえ暴君であってもキリストは武器を取らず祈りと涙に訴え為政者への服従を説いた⁽³⁰⁾。キリスト死後の300年間諸皇帝のキリスト教徒への迫害には容赦はなかったが、それでもキリスト教徒は彼らに対して反乱を企てたことはなかった。偽の神への生け贄を命令されたキリスト教徒兵士は皇帝のもとを離れたが、再度同じ生け贄を行うように命令された。彼らは謙虚にその命令を拒否し、怒った皇帝は彼らを処刑にしたが、彼らは自ら進んでその処刑に屈し、迫害者のために祈りながら死んでいった⁽³¹⁾。このようにキリストやキリスト教徒は権力への服従を甘んじて受け入れ、決して為政者への服従を拒否することはなかった。これに反しジェームズ一世へのカトリック教会の態度はどうか。火薬陰謀事件がはっきりと示しているように、カトリック教会は王への服従を拒否し、王と国家への支配権を強化している。ランブローは次のようにローマカトリック教会の俗権へ

の介入を批判する。

We know that they [Popery] pretend the Church of Rome, but they intend the Court of Rome; their loud cry is not for Diana, but for the Silver-Shrine; not for the State of the Church, but for the State and Pomp of the Church-Men, to make the Pope and his Clergy absolute Lords of the World; ⁽³²⁾

カトリック教会の俗権志向は、言うなればカトリック教徒の関心がローマ「教会」でなくローマ「宮廷」確立にあることを示している。彼らはDianaではなく「銀の聖堂」を声高く叫んでいる。Dianaはローマ神話では月の女神であるがここでは神を表していると考えてよい。彼らはその神を求めることもせず、豪華な寺院創設に奔走するだけである。教会ではなく教会関係者の威厳と華麗だけに関心があり、教皇と聖職者を世界のあらゆる権力、快樂、利益の絶対的な支配者としている。このようなカトリック教徒の俗権志向が1605年の火薬陰謀事件の引き金となったのである。火薬陰謀事件はイギリスの宗教と政府転覆を謀ったジェズイットによる陰謀で、ジェズイットは神を忘れて彼らのために教会と国家両方における最も有益な地位を狙っていただけなのである。カトリック教会の基本的教義は聖書よりは「有益のための論証法」⁽³³⁾に基づいている。いかにすればカトリック教会に利益がもたされるか、これがカトリック教徒の最も重要な行動基準となる。世俗化したカトリック教会批判は具体的に教皇至上権、煉獄、免罪符、死者への祈り、秘密告白の維持へと向けられる。ジェームズ一世とカトリック教会側との対立を考えると最大論点は教皇至上権である。これに対してランブローは、教皇の至上権はローマ側が空想上の考案物であると大胆にも述べている。それは地上の全てへの教皇の絶対的支配権を意味し、その支配権は王や王国処分をも可能にする権力である。この権力は聖ペテロにもなかった俗権で、教皇の権利ではなく教皇が強奪した権利である。カトリック教会の教義はすべては「単なる私利と彼らに都合のよい事柄」である⁽³⁴⁾。彼らの論理に従えば徳は悪徳となり、悪徳は徳なる⁽³⁵⁾。イギリスが最も危惧したカトリック教の王廢位についてもそれは単なる捏造にすぎない。

...so in another [point], of Depositing of Kings, to confound and entangle the more Curious and Inquisitive, they [Popery] have recourse to this Forge, and with a Good-Quill, and within a few Distinctions, they are able to remove any King's Crown from his Head.⁽³⁶⁾

王廃位という捏造理論によってカトリック教会は王から王位を奪う。ランブルは更に教皇の王廃位権のみならずカトリック教そのものが人間の考案物にすぎないと大胆な批判を続ける。

...we shall find Popery, for the most part, to be but a meer Contrivance of the Wit of Man, an Invention of Ambition, Covetousness, Sensuality, but upon Humane Traditions, and those many time contrary to the Canon of Scripture, and settled [sic] Rules of Duty.⁽³⁷⁾

カトリック教は人間の知恵の単なる考案、野心と貪欲と好色の発明であり、人間の伝統、聖書の規範に反する事柄に基づいている。カトリック教は聖書に反する架空の空想の産物である。それはまた「神聖な虚構」と発明品で満ち、ザクロのように「発明物」の仁、教会の「壮大な発明」で一杯である⁽³⁸⁾。なぜ彼らがそれほどまでカトリック教を押し広めねばならないのか。それはすべて教皇の至上権のためである。だから彼らは王国処分という荒技を使い、イギリスを他国に譲渡するのである。それはエリザベス女王を認めず、破門したことから明かである。カトリック教会の横暴な王廃位はジェームズ一世への敵視政策となって表れ、それが再びイギリスに対して行われようとしている。カトリック教会の俗権行使はいわば神の名を徒に語り、神に誓って偽証し、偽証の証人になるように神にお願いしているようなものである⁽³⁹⁾。靈感の代わりに邪悪な計画を口に出し、神がそのような計画を彼らに与えたという人々は徒に神の名を口にするだけでなく偽証以上の罪を犯している。ジェズイットはまさにこのような集団である。神を偽りの証人へと呼ぶだけでなく、神を嘘の第一の立案者に行っている⁽⁴⁰⁾。ランブルは、我々は律法ではなく福音の下にあるの

で、エリアのように行うべきではない。つまり、「聖書という固定した基準、神の啓示意志」が認める以外には教えたり、実践したりすべきではない。天からの新しい啓示や声を主張したり、もっともらしい口実の下で我々の虚偽、妄想、詐欺行為を世の中に伝えるべきではない、と言ったが、カトリック教会の俗権行使は正に「虚偽、妄想、詐欺行為」⁽⁴¹⁾に他ならない。ランプルーはギリシアの諷刺散文作家ルキアノスが語った詐欺師について触れている。その詐欺師は人々を欺くために彼が勝手に作り上げた神託所では神でもあり祭司でもあった。その詐欺師はわめき、恍惚状態を装い、神がかり的な興奮状態に陥っているふりまでして神託を告げた。カトリック教会はこれと同じ事を行っていると言っている。ランプルーは言う。カトリック教徒は神の命令の代わりに彼らの空想を持ち出し、偽の神託を作り上げる。彼らの虚偽の神聖な恍惚状態にはもっともらしさがあがり、そのために人々は欺かれる。カトリック教徒はそのような「虚構」を人々に伝え、人々を欺くのである。カトリック教会の「虚偽、妄想、詐欺行為」を指摘するランプルーは説教の最後に至り、「イザヤ書」29章15節の「災いなるかな。おのが計りごとを主に深く隠す者。彼らは暗い中でわざを行い、だれが我々を見るか、誰が我々のことを知るか」を引用する。いかにカトリック教徒が巧妙に悪事を隠そうともそれは必ずや主の目にとまるところとなるとランプルーは言う⁽⁴²⁾。敵のローマはまさに「おのが計りごとを主に隠す者」である。彼らは国会の地下にうずくまり、壁に穴を掘り、密かに隠れ家に自らを潜ませ、罪なきものを殺害する。仲間では秘密を守り、心の中では「誰が我々を見るか」と秘密がもれるはずはないと思っている。いかに密かに隠れて陰謀を計画しても主なる神はそれを見ている。彼らはエルサレムを倒せ、バビロンを立てよと叫ぶが、それは「真の改革宗教を倒せ、偶像と迷信を立てよ、法の順守と秩序を倒せ、混乱を立てよ、君主と貴族を倒せ、国家の支柱と花を倒せ、残虐な破壊で彼らを滅ぼすことによって、すべてをひっくり返す」⁽⁴³⁾ようなものである。しかしどんなに巧妙に彼らが策を弄そうとも主なる神は全てを見通しており、慈悲を示してくれる。神はカトリック教徒の陰謀にもかかわらず、イギリスを救出してくれたのである。火薬陰謀事件の性質から言えば「ルカ伝」9章55-56節よりも「イザヤ書」29章15節がはるかに記念説教の題材にはふさわしかった。

「イザヤ書」29章15節ならば火薬陰謀事件への適応はうまくいく。他の説教家なら「神の国」イギリスを大々的に持ちあげるところだがランプルーは「ルカ伝」説教ではそこまでは行っていない。しかし「イザヤ書」ならば神から特別な慈悲を受けるイギリスを強調できる。いずれにせよランプルーは、カトリック教徒のイギリスへの凶悪事件はエリアの精神、律法精神に基づくことを主張しているだけなのである。カトリック教会の「虚偽、妄想、詐欺行為」はランプルーのカトリック教会への批判を如実に表しているが、それは「ルカ伝」とは関係なく唐突に表れている感が強い。「ルカ伝」との希薄な関連性が浮かび上がってくる。

ランプルーは、「ルカ伝」9章55-56節から急にカトリック教会批判を行う。カトリック教会が本来専念すべき魂の救済を忘れ、俗事にまで介入し、宗教心をないがしろにしている様をランプルーは指摘する。これらの批判は「ルカ伝」とは余り関係はない。キリストを敵対視したサマリア人からジェームズ一世と対立したカトリック教会批判は説教の展開からは孤立している。サマリア人のエピソードではキリストのサマリア人への慈悲が問題となっていた。火薬陰謀事件はジェームズ一世の殺害という凶悪な犯罪であり、ランプルーはそれを中心的テーマとして扱う必要があった。それはまたは事件の背後にあるカトリック教会批判を自ずから導き出す。ランプルーの火薬陰謀事件記念の最大の欠点は説教の題材としてあげた「ルカ伝」9章55-56節からはかけ離れた常套的なカトリック教批判が説教の大部分を占めているということである。更には問題なのは説教の終盤でランプルーのカトリック教会批判がイギリス人各人の罪の悔い改め勧めに取って代わられていることである。ランプルーは「イザヤ書」29章15節を援用して、いかなる悪事も神は見逃さないとカトリック教徒への批判のボルテージを一気に上げ、聴衆に強いインパクトを与えることができたが、それを中止し、代わりにランプルーはイギリス人に罪の悔い改めを勧める。これは従来の火薬陰謀事件記念説教には見られない説教の終わり方である。火薬陰謀事件記念説教は(1)火薬陰謀事件に類似した聖書の一節の解釈(2)聖書の火薬陰謀事件への適応(3)事件の凶悪さ(4)ジェームズ一世の救出とその喜び(5)ジェームズ一世救出に際しての神の慈悲への感謝、から構成されるのが普通で

ある。火薬陰謀事件記念説教を最も多く行ったランスロット・アンドルーズやその他の説教家たちはすべてこの手順に従っている。説教の善し悪しは説教家を選ぶ聖書の一節にある。聖書の一節が火薬陰謀事件にぴったりと適応されれば説教は成功する。いかに凶悪な火薬陰謀事件から奇跡的にジェームズ一世が救出されたか、そしてジェームズ一世への凶悪事件は神によって必ずや処罰されるかを聖書の一節から聴衆に訴えることができればその説教は成功と言える。ランプルーの火薬陰謀事件説教を見てみると、彼の説教は従来の説教の手順に従っているとは必ずしも言えない。(1)の聖書の一節の解釈に関しては、「ルカ伝」9章55-56節を取り上げ、そこからキリストの福音精神と弟子たちの律法精神を論じているが、(4)のジェームズ一世救出と救出の喜びについてランプルーは述べはしない。火薬陰謀事件からの奇跡的なジェームズ一世救出は説教の一番のハイライトであるが、ランプルーはそれについては特に取り上げはしない。火薬陰謀事件記念説教は(5)の神の慈悲への感謝で終わるのであるが、ランプルーの説教は神への感謝ではなくイギリス人への罪の悔い改めを勧めることで終わっている。なぜなら罪の悔い改めによってイギリスへの神からの絶えざる保護が保証されるからである。

And beeing deeply sensible of the imminent danger both the King and Kingdom are in; to other searchings, let every one of us add the searching of his own Heart, to see what Sins, what bold, presumptuous, unrepented Sins lie hid and lodged there, to lament over these, and to remove those Troubles of our *Israel*; that God may yet take delight to do us good, and be once more intreated for the Land.⁽⁴⁴⁾

イギリス国民は今一度謙虚な気持ちで神への感謝を表明する必要がある。そうすれば神は喜んでイギリス国民へ慈悲を垂れてくれる。罪を悔いるのはイギリス国民すべてでなくともよい。ほんのわずかな人だけでもいいから罪を悔いれば神はイギリスを忘れることはない⁽⁴⁵⁾。ランプルーによれば人々の罪は蔓延している。人々の罪の悔い改めがなければ神は決してその苦しめの手を止めることはない。神に対して傲慢な不遜な態度をとり、神の存在を忘れるときには神

の罰は必至である。我々は絶えず神の前では頭を垂れ、謙虚な姿勢を見せねばならない。ランプルーは、神が少数の人に満足した例として10人の正しい人のためにソドムを救ったこと（「創世記」18章32節）や「エレミア書」5章1節に言及し、エルサレムに一人の正義の実行者も真理を求める人もいなかったと嘆くエレミアに触れ、もしエルサレムに一人でも正義や真理を求める者がいたら神はエルサレムを救ったであろうと言う⁽⁴⁶⁾。神はいつも変わらぬ姿を見せている。イギリス人が罪を悔い改めるならば神は喜んでイギリスを救ってくれるということはソドムやエルサレムに対する神の救いを見れば理解できる。仮に10人の正しい人がソドムを救ったのであれば同じ数否それ以下の正しい人は罪深いイギリスを救うこともありうる⁽⁴⁷⁾。ランプルーはイギリスを「罪ある国」と呼んでいるが、これは最近では1678年のジェズイットによるチャールズ二世暗殺未遂事件に言及しているのであろう。イギリスにおいて国王を暗殺するという忌まわしい事件はたとえそれが未遂に終わったにしても、地上における神の代理人たる王へのはなはだしい不遜な行為であることには変わりがない。ランプルーは、国王殺害という事件を引き起こしたイギリスの現状に憂いをよせ、神への敬虔な姿勢の欠如がその事件を引き起こしたと見ている。だからイギリス国民は神への不遜な態度を改め、今一度神に対して心から罪ある姿をさらけ出し、神の慈悲を請うべきであるというのである。ほんのわずかな人だけでも悔い改めの姿勢を示せばイギリスへの神の加護はイギリスを破滅と破壊から救ってくれる。

ランプルーはそれまでの火薬陰謀事件記念説教の常套的なジェームズ一世救出への神への感謝で説教を終わらせず、イギリス人の罪の悔い改めを勧めることで説教を終えている。説教の主演はジェームズ一世であるのにその主演は影を潜め、代わりにイギリス人への罪の悔い改めが前面に出てきている。ランプルーの説教が火薬陰謀事件での中心的人物であるジェームズ一世を全面的に扱い、王の危機的状況からの奇跡的脱出と神の慈悲を最後まで論ずればこの説教は成功と言えた。あるいは1678年のカトリック陰謀事件をも絡ませてカトリック教徒の国家転覆への野心を扱えば、説教は大いに盛り上がったに違いない。ところがランプルーは説教の終盤に至り、それまでのカトリック教徒への批判

からイギリス人の罪の悔い改めへと説教を急転させる。事件の被害者の王から国民へと論が展開するのはいささかの驚きである。ランプルーの説教の急転にはいかなる意図があったのか。罪の悔い改めによって永遠の神の加護を受けることが可能であるとランプルーは言いたかったように思われるが、それは火薬陰謀事件記念説教の目的とはずれた主張である。あくまでも記念説教では火薬陰謀事件が中心的テーマである。いかに火薬陰謀事件にジェームズ一世が関わり、いかにしてジェームズ一世がその危機を脱出したか、事件を計画したジェズイットがいかに危険な存在であるかそしてイギリスがいかに「神の国」であるかを訴えるのが記念説教の第一の狙いである。そして危険分子たるジェズイットひいてはカトリック教会によるイギリスのカトリック化をいかにしていく止め、王を中心にして国家の秩序の維持を国民に訴えることが説教家に課せられた任務でもあった。ところがランプルーは説教の最後に至ってカトリック教会のイギリスへの脅威を訴える代わりにイギリス人に罪の悔い改めを勧める。火薬陰謀事件記念説教には一種のアジ的演説めいたところも多々あったが、ランプルーはどうしたわけか罪の悔い改めを最終的に訴え、カトリック教会との対決姿勢を崩している。これはいかなる理由によるのか。ランプルーに特別な意図があったのであろうか。ここで我々はランプルーの説教がチャールズ二世の下での説教であったという事実に注目しなければならない。

む す び

ランプルーが火薬陰謀事件記念説教を行ったのは1678年11月5日であった。イギリス国内ではそれ以前にカトリック教問題が頻発していた。1640-1643年のカトリック教徒陰謀の噂、1641年のアイルランド反乱の勃発時のイギリス国内でのカトリック教徒反乱の噂、1665年のペスト流行、翌年1666年のロンドン大火、これにはカトリック教徒による放火との噂が飛び交う。1672年の信仰自由宣言、1673年、1678年の審査法、そして1678年の夏にはジェズイットによるチャールズ二世殺害陰謀事件のうわさが流れる。カトリック教徒へのイギリス人の恐怖、不安、不信はいやがうえにも増していく。そのような状況のなかで

のランプルーの火薬陰謀事件記念説教である。イギリス国教会の主教がカトリック教寄りのチャールズ二世下の上院でどのような説教を行うかは聴衆の注目の的であった。1678年の審査法では上院と下院のカトリック教徒の議員資格を剥奪したので、ランプルーが説教を行った日にはカトリック教徒の上院議員はいなかったはずである。聴衆は、ランプルーが火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットへの批判をどのように行うかに関心を抱いたことは疑いない。事件首謀者への容赦のない非難を聴衆は期待したはずである。ところが「ルカ伝」9章55-56節ではキリストから弟子たちの「律法」精神を叱責され、サマリア人に対してすら「福音」精神を抱かなければならないと主張されている。批判されるのはサマリア人焼却を提案したキリストの二人の弟子である。ランプルーは、「ルカ伝」からカトリック教会全体への批判を続けるが、それは従来の伝統的な批判の繰り返しにすぎない。私は、これはランプルーがチャールズ二世を意識した結果であると言わざるをえない。チャールズ二世は1660年に亡命国から帰国したが、その亡命先は言わずと知れたカトリック教大国フランスである。1670年に調印されたドーバー条約にはチャールズ二世がカトリック教への改宗宣言を行う秘密項目が含まれており、ルイ14世は民衆の反発を鎮めるための軍事援助の約束までしていた。チャールズ二世のカトリック教徒への寛容政策も相まって王自身もカトリック教徒であるとの噂が流れていた。ランプルーは反カトリック教的な言動への政府の監視が厳しいことを知っていたはずである。それにもかかわらずランプルーは説教でカトリック教を批判する。ジェズイットによるチャールズ二世暗殺未遂事件の噂が広まるなかでの火薬陰謀事件説教の首謀者ジェズイット及びその背後のカトリック教会を批判することがランプルーに課せられていたからであった。確かにランプルーはジェズイット批判を行ってはいらぬ。しかし自由気ままにジェズイット、カトリック教を非難することはランプルーにはできなかった。チャールズ二世の時代、特にカトリック教徒陰謀事件の間、説教は大衆には大きな影響を及ぼし、人気説教家の説教には聴衆が殺到した。チャールズ二世自身も説教には興味を抱いていた。ランプルーの説教は上院で行われたが、もしその説教がチャールズ二世臨席の下で行われたならばそれはどのような説教となっていたであろうか。反カトリック

教の立場を取っていたジェームズ一世下では、説教家にとって火薬陰謀事件説教は行いやすかった。しかし、チャールズ二世は反カトリック教の説教には敏感であったと思われる。説教全般に見られるランブリーの反カトリック教的立場は明白であるが、その説教にはまた、チャールズ二世を意識したような発言が見られるのも確かである。例えば、教皇が「反キリスト」であるとの考えに対するランブリーの態度である。反キリストとしての教皇観はプロテスタントの常套的な攻撃手段であったが、チャールズ二世の下では教皇＝反キリストは決して認められなかった⁽⁴⁸⁾。それを知ってかランブリーは、教皇が反キリストかどうかに関しては一度しか触れていない⁽⁴⁹⁾。更に興味深いのはランブリーはチャールズ二世については“our Dread Sovereign that now is”⁽⁵⁰⁾と一度だけしか言及せず、王の名前を全く出していない。王を説教に登場させて王を喜ばすべきであったがランブリーはあえてそれを行おうとはしない。ランブリーは説教の最後でいかにカトリック教徒が密かに陰謀を試みてもそれは必ず神によって暴かれると述べている。しかしその後神による悪事の発見については触れられず、罪深いイギリス国民への罪の悔い改めへと説教は進展していく。カトリック教徒への批判は最後まで続かない。逆にイギリス国民の罪深さを指摘し、その罪の軽減のために悔い改めを国民に勧めるのである。ランブリーは、チャールズ二世のカトリック教徒への寛容策から王のカトリック教徒に対する真意を見抜いていたことは容易に察しがつく。それがためにランブリーはカトリック教会及びカトリック教徒へ容赦のない批判を続けることができなかつたのである⁽⁵¹⁾。その意味で説教家ランブリーの立場は極めて微妙であった。火薬陰謀事件日における説教からしてカトリック教会を批判するのは説教家に要求された当然の義務である。その一方で、カトリック教徒とは公言しないまでも親カトリック教政策を打ち出すチャールズ二世下では火薬陰謀事件を露骨に非難できない。ランブリーの説教そのものは「ルカ伝」9章55-56節を題材として、サムリア人への焼却をイエスに提案する弟子のヤコブとヨハネを批判からカトリック教会批判へと続くが、説教の最後に至ってカトリック教会への批判が姿を消し、イギリス人の罪深さへ説教が展開していく。従来の火薬陰謀事件からのジェームズ一世の奇跡的な救出に対する神への感謝では終わっていない。17世

紀前半の火薬陰謀事件説教では王への追従的な説教が多かった。しかしランプルーは全面的にチャールズ二世に迎合するような説教はできなかったであろう。もしそのような説教を行えばランプルー自身がカトリック教徒的であると見なされる危険は十分にあった。イギリス国教会の聖職者としてそれは決してあってはならないことである。もしランプルーが説教のなかで火薬陰謀事件と共にカトリック陰謀事件もあわせて扱えば、それはチャールズ二世を賞賛するの説教となったであろう。しかし国民の反カトリック教的な雰囲気の高いなかでそれは不可能であった。それを意識してかランプルーは説教の数ヶ月前に起こったカトリック陰謀事件には“the late Horrid plot”⁽⁵²⁾と“another Plot and Conspiracy”⁽⁵³⁾と二度しか触れていない。聴衆の中にはランプルーが両事件について言及するのを期待した者もいたであろうが、チャールズ二世の親カトリック教的な立場を考えるとそれも不可能であった。火薬陰謀事件でカトリック教徒を批判したランプルーにとって1678年のカトリック陰謀事件を取り上げてカトリック教徒を批判することも容易であったはずである。しかし、ランプルーはあえてカトリック陰謀事件を説教の一部として取り上げはしなかった。火薬陰謀事件説教でイギリス国教会の聖職者としてランプルーはその任務を果たすがカトリック教へ傾倒しているチャールズ二世下ではランプルーは王の存在を意識せざるをえなかった。それがためにランプルーの説教は歯切れの悪い印象を与える説教となったのである。

ランプルーの火薬陰謀事件記念説教は説教の翌日11月6日に彼自身の命令により印刷された唯一の説教であった。国王に認められるとかよほどのことがない限り生前に説教が印刷・出版されることはほとんどなかった。ランプルーは自分の説教によほどの自信があったのだろうが、また、聴衆に疑問を投げかける説教でもあった。ランプルーの説教については同時代人からは特にコメントはない。ということはランプルーの説教は聴衆や読者を感じさせるほどの強烈な印象は与えなかったのかもしれない。いずれにせよ「正真正銘の王党派」ランプルーはイギリス国教会主教として果たすべき最小限の義務は果たしたと言えるであろう⁽⁵⁴⁾。

注

- (1) ランプルーについては*DNB*のランブルーの項目を参照した。ランブルーについて論じた研究書はない。
- (2) ランプルーの説教は以下を使用した。A SERMON PREACHED before the HOUSE of LORDS ON THE *FIFTH* of *NOVEMBER* IN THE ABBY CHURCH at WESTMINSTER. by the Right Reverend Father in God, *THOMAS*, Lord Bishop of *EXETER* (London, 1678). *STC*のマイクロフィッシュからの説教である。なお、*THOMAS*とはThomas Lamplughである。
- (3) Lamplugh, 5.
- (4) Lamplugh, 1.
- (5) Lamplugh, 5.
- (6) Lamplugh, 16.
- (7) Lamplugh, 16.
- (8) Lamplugh, 16.
- (9) Lamplugh, 22.
- (10) Lamplugh, 22.
- (11) Lamplugh, 36.
- (12) Lamplugh, 16.
- (13) Lamplugh, 19.
- (14) Lamplugh, 37.
- (15) Lamplugh, 37.
- (16) Lamplugh, 19.
- (17) Lamplugh, 20.
- (18) Lamplugh, 21.
- (19) Lamplugh, 21.
- (20) Lamplugh, 32.
- (21) Lamplugh, 34.
- (22) Lamplugh, 35.
- (23) Lamplugh, 35.
- (24) Lamplugh, 3.
- (25) Lamplugh, 4.

- (26) Lamplugh, 36-37.
 (27) Lamplugh, 24-25.
 (28) Lamplugh, 38.
 (29) Lamplugh, 39.
 (30) Lamplugh, 39.
 (31) Lamplugh, 39.
 (32) Lamplugh, 24.
 (33) Lamplugh, 25.
 (34) Lamplugh, 27.
 (35) Lamplugh, 30.
 (36) Lamplugh, 31.
 (37) Lamplugh, 31.
 (38) Lamplugh, 24.
 (39) Lamplugh, 23.
 (40) Lamplugh, 23-24.
 (41) Lamplugh, 22.
 (42) Lamplugh, 42.
 (43) Lamplugh, 42-43.
 (44) Lamplugh, 46.
 (45) Lamplugh, 46.
 (46) Lamplugh, 47.
 (47) Lamplugh, 47.
 (48) John Miller, *Popery & Politics in England 1660-1688*, Cambridge University Press, 1973, p. 88
 (49) Lamplugh, 30.
 (50) Lamplugh, 44.
 (51) 例えばアンドルー・マーヴェルによるカトリック教批判書の印刷業者は投獄され、政府は作者を突き止めた者への報奨金さえ準備した。John Dixon Hunt, *Andrew Marvell: his life and writings* (London: Paul Flek, 1978), pp. 182-183 を参照。
 (52) Lamplugh, 24.
 (53) Lamplugh, 43.
 (54) Lamplughの説教は上院で行われたが同日下院では John Tillotson がやはり火薬

陰謀事件記念説教を行っている。しかも両者とも同じ「ルカ伝」9章55-56節を説教の題材として選んでいる。更に興味深いことは1609年に Lancelot Andrewes が「ルカ伝」9章55-56節を基に火薬陰謀事件記念説教を行っている。Tillotson と Lamplugh の「ルカ伝」解釈や説教全体の構成は Andrewes の説教と類似してる。Tillotson と Lamplugh は Andrewes の説教をモデルとしているのかは推察の域を超えないが、これらの関係については稿を改めて論じたい。

References

- Charles Arnold-Baker: *The Companion to British History*. Second edition. London and New York: Routledge, 2001.
- Sir George Clark: *The Later Stuarts 1660-1714*. Rep. Second edition. Oxford: At the Clarendon Press, 1972.
- Tim Harris: *London Crowds in the Reign of Charles II*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- William H. Hutton: *The English Church From the Accession of Charles I to the Death of Ann (1625-1714)*. Vol. 6. Rep. New York: AMS Press, 1903.
- J. P. Kenyon: *The Stuarts A Study in English Kingship*. London and Glasgow: Collins, 1967.
- John Coffey: *Persecution and Toleration in Protestant England, 1558-1689*. Essex: Pearson Education Limited, 2000.
- Michael Mckee: *Politics and Poetry in Restoration England*. Massachusetts and London: Harvard University Press, 1975.
- 松村尅・富田虎男編「英米史辞典」, 東京: 研究社, 2000.